

1 2	知教連 (南知多町)	○南知多中 ^{ヒラノ} 平野 ^{カツヒロ} 勝洋 南知多中 木村 辰浩 内 海 小 飯田 七望 豊 浜 小 榊原 拓久 みさき小 細谷 耕平 日間賀小 杉浦 允紀 篠 島 中 尾関 由里菜
-----	---------------	---

分科会番号	1 3	分科会名	能力・発達・学習と評価
-------	-----	------	-------------

自ら考え、他者と共によりよく生きようとする子どもの育成
～自己を見つめ、関わり合う道徳の授業を通して～

1 主題設定の理由

南知多町には、中学校が2校、小学校が5校ある。昨年度までの学校再編により、子どもたちは、これまで以上に多くの友達と関わって学ぶ機会を得ることになった。南知多町は年々子どもの数が減少してきており、町内の小学校全学年が単学級である。小学校ではクラス替えがなく、仲の深まった人間関係のみに固執してしまい、自ら積極的に関わり合おうとしない子どもが見られる。その結果、中学校でも集団が固定化されてしまう傾向にある。学習面においても、特定の集団での学びになってしまい、他の集団との関わり合いの中では自分の考えに自信がもてず、他者と自分の意見を共有して課題を解決することが苦手な子どもがいる。変化の激しい現代では、子どもたち一人一人に自己の生き方を考えさせ、主体的な判断の下に行動できることや、他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことが求められている。

昨年度の研究では、自ら考え、他者と共によりよく生きようとする子どもの育成を目指し、自我関与を促す工夫をした授業実践を行った。教材に登場する人物の気持ちになって考え問題場面を自分事として考えることができた。しかし、考えたことを日常生活につなげて考えることができていなかったため、道徳的価値の一般化については課題が残った。

こうした課題と昨年度までの研究を踏まえ、令和6年度の研究では、道徳科の学習において、「教材の工夫」を重視したり、「道徳的価値について意見交流をする場」を設定したりすることで、自ら進んで考え、他者と共によりよく生きようとする子どもを育成したいと考え、本主題を設定した。

2 研究の方法

(1) 目指す子ども像

自ら考え、他者と共によりよく生きようとする子ども

(2) 研究の仮説と手だて

【仮説1】

道徳的価値について考える場面において、教科書に載っている教材に加え、身近な出来事についても取り上げることで、日常生活にも目を向け、自己の生き方について考えを深めることができるであろう。

【仮説1に対する手だて①】教材の工夫

道徳的価値と結びつきのある場面を学校生活や日常生活の中から切り抜き、授業の補助発問として用意する。

【仮説2】

道徳的価値について意見交換する場において、学級全体の意見を可視化することで多様な考えに触れ、共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養えるであろう。

【仮説2に対する手だて②】思考ツールによる意見の可視化

意見交換をする場では、ホワイトボードを用いたり、各自の考えを座標軸やXチャートなどの思考ツールを活用したりして学級全体の意見を可視化できるようにする。

3 研究の実際と考察

(1) 南知多中 2年 教材名「わたしのせいじゃない」(中学道徳2 とびだそう未来へ：教育出版)

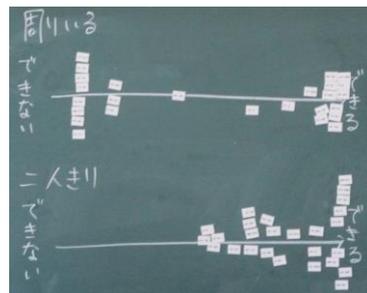
① ねらい

正しい行動をとりたいという気持ちはありながら、行動に移すことのできない弱さに気付かせ、強い意志をもって周囲の人と共によりよい社会を築いていこうとする心情を育てる。

② 授業の様子

本教材は、いじめの構図と立場による心情の違いについて描かれている。特に、傍観者に焦点を当てて、責任のなすりつけ合いが描かれている。

導入では、教材中のいじめの加害者や傍観者の台詞が書かれたカードを示した。周りにたくさんの人がいる場面で、被害者を助ける声掛けができるかどうかを考えさせた。黒板の「声掛けができる」・「できない」と書かれた座標軸に、ネームカードを貼らせた(写真1)。次に、教室で被害者と二人きりの場合について、同様にしてネームカードを貼らせた。その際、座標軸は上下に位置させ、場面による心情の変化を視覚的に確認できるようにした。周りにたくさん人がある場面では助けることができないと答えた生徒に意見を發表



【写真1 思考ツールの活用】



【写真2 意見交換の様子】

させた。「周りの人に流されてしまう」「もしかしたら自分もいじめられてしまうかもしれない」といった意見が出た。いじめはよくないことであることを確認した上で、なぜ周りに人がある場面では正しい行動をとれないのか理由を考えさせた。

そこで、日常生活に目を向けさせ、正しいと分かっているのに行動できない場面を学級全体で共有した。「授業が始まっているのに話してしまうとき」「友達が悪口を言っているとき」「話し合い活動で自分が少数意見で発言ができないとき」「落ちているごみを見て見ぬふりをしてしまうとき」といった意見が出た。この4つの場面について、グループごとに意見交換をさせた(写真2)。「友達に嫌われてしまうかもしれない」「関係が気まづくなってしまうかもしれない」など、人間関係を心配してしまうときに正しい行動がとれなくなってしまう生徒が多かった。ここで、本教材と日常生活での場面との共通点として、正しい行動がとれない理由は、周囲の目が気になるときだと押さえた。自分の心の弱さにも目を向け、正しい行動をとるために大切なことを考えさせた。

③ 考察

仮説1について、教科書の教材だけではなく、日常生活での類似した出来事について取り上げたことで、自己の生活の中でも同じように正しい行動をとれない場面が多数あることに気付かせることができた。また、周囲の目を気にしたり、誰かがやってくれるだろうと考えたりすることが共通していることに気付かせることができた。

仮説2について、座標軸を使うことで視覚的に自分と似た立場の人がどのくらいいるのかを捉えやすくすることができた。他の生徒の考えを意識しながら自分の意見を発表することができた。一方で、座標軸の活用で課題が残った。生徒に問い直したり、貼り直す時間を設けたりして、他の生徒の思いや感覚の違いを知る場面があるとよかった。

(2) 内海小 2年 教材名「お月さまとコロ」(小学道徳2 はばたこう明日へ:教育出版)

① ねらい

いけないことをしてしまったときには素直にその非を認めることの大切さに気づき、素直で正直な気持ちを大切にしていこうとする心情を育てる。

② 授業の様子

本教材は、なかなか謝ることができない主人公の気持ちや、「謝ろう」と決心したときの気持ちを考えることを通して、素直に自分の非を認め、謝ることのすがすがしさに気付かせる教材である。

導入では、「けんかをして、謝れなかったことはありますか」と聞き、謝れない時の気持ちを考えさせた。「お互いが悪いから、自分が謝るのはもやもやする」「先に手を出してきたのが相手だから、自分は悪くない」、「相手が怒っているから怖い」といった意見が出た。

本学級の児童は、けんかの際に相手のせいにして謝れないことが多い。この実態から自分事として考えさせたいと思い、謝れない主人公の気持ちについて考えさせた。「謝ってもっと怒られたらどうしよう」「自分が悪いことをしたけど、緊張して言えない」といった意見が出た。そこで、「自分が友達を怒らせてしまったときに、素直に謝れるだろうか」という発問をし、



【写真3 思考ツールの活用】

道徳ノートに自分の考えを書かせた。その後、黒板の「謝れる」・「謝れない」と書かれた座標軸に、ネームカードを貼らせた(写真3)。座標軸を用いてそれぞれの立場を確認してから、自分の意見を発表させた。「謝れる」と答えた児童は、「友達がいなくなるのは嫌だ」「友達に怒られるから」という考えだった。一方で、「謝れない」と答えた児童は、「謝ったらもっと怒られるかも」「聞いてもらえないかもしれない」という考えだった。

③ 考察

仮説1について、教材の内容だけではなく、自分が友達を怒らせてしまったときについて考えさせることで、主人公の気持ちになかなか気付かなかった児童も、「自分が友達とけんかをしたら謝れるか」と問いかけることで、自分だったらどうするかという視点で考えることができた。

仮説2について、座標軸にネームカードを貼り、学級全体の意見を可視化したことで、自分の立場を明確にして発表することができた。また、自分と同じ立場の人がいると分かったことで安心して意見を発表することができたり、異なる立場の意見に興味をもって聞いて比べたりするなど、自分の考えを深めることができた。

(3) 豊浜小 5年 教材名「わたしにできることを」(小学道徳5 はばたこう明日へ：教育出版)

① ねらい

認知症の祖父に対する主人公の思いについて話し合うことを通して、家族に対する思いを深め、進んで家族の役に立つことをしようとする心情を育てる。

② 授業の様子

本教材では、主人公の祖父に少しずつ認知症の症状が現れる様子が描かれている。母親のアドバイスをもとに、主人公が祖父のためにできることを考え、日々の出来事を話しかける姿が描かれている。



『わたし』はどんな思いでおじいちゃんに話しかけているのだろう」という問いを主発問にしてグループで意見交換をさせた。グループで出た意見をまとめる

【写真4 意見交換の様子】

ためにホワイトボードを用いた(写真4)。「自分を忘れないでほしい」や「毎日笑顔でいてほしい」といった意見が出た。認知症の症状について理解をした上で、主人公の立場に立って意見を述べたり、共感したりする様子が見られた。

その後、振り返りとして、自分が家族にしてもらっていることへの感謝の気持ちをもたせ、これから家族のために何ができるのかを考えさせ、家族へ手紙を書かせた。

③ 考察

仮説1について、教科書の教材だけでなく家族への手紙を扱うことで、家族のために自分にできることを考えさせることができた。また、手紙として家族に伝えることで、家族への思いを深めることができた。

仮説2について、考えを整理するためにホワイトボードを活用したことで、グループだけでなく、学級全体の意見を捉えやすくすることができた。また、多くの意見を扱ったことで多様な考え方に触れ、よりよく生きるための心情を養うことができた。しかし、ホワイトボードだけでは、意見を分類したり心情の変化を押さえたりすることは難しく、学級全体の意見を可視化するためには、思考ツールを活用する方が有効であると感じた。

(4) 日間賀小 2年 教材名「金のおの」(小学道徳2 はばたこう明日へ：教育出版)

① ねらい

主人公の行動から正直に生きることの大切さに気づき、うそをついたり、ごまかしたりせず正直に生活していこうとする判断力を育てる。

② 授業の様子

本教材は、仲間が金の斧を手にした話から、主人公が金の斧をもらうためにうそをつく話である。正直に答えなかったため金の斧がもらえなかったことから正直に生きる大切さを考える教材である。



導入では、「うそをついたことがあるか」と発問して日常生活に目を向けさせた。黒板の「ある」・「な

【写真5 思考ツールの活用】

い」と書かれた座標軸に、ネームカードを貼らせた（写真5）。うそをついた理由は、「家庭学習をやったとうそをつきゲームをしたことがある」という意見が多かった。

展開では、「主人公がうそをついてしまったのはなぜか」と発問して主人公の気持ちを考えさせた。「金の斧がほしかった」「うそをつけばもらえと思った」といった意見が出た。また、「自分ならどうするか」と発問し、黒板の「正直に言う」・「正直に言わない」と書かれた座標軸に、ネームカードを貼らせた。「正直に言う」と答えた児童は、「うそをついたことがない」と答えた児童に比べて増加した。教材を通して正直に生きることの大切さを感じていた。

③ 考察

仮説1について、教材だけではなく日常生活の場面を取り入れたことで、ネームカードを見ながら「〇〇さんはどういう時にうそをついたの？」とより具体的に考えさせることができた。しかし、うそをついたことがあると答えた児童も教材内では正直に答えるべきと発表していた。うそをつく理由が本教材と日常生活とでは異なっていたため、導入の発問は妥当なものとは言えず、考えを深めることができなかった。

仮説2について、考えを比較させるために思考ツールを用いたことで、意見を聞く際に、ネームカードを見て同じ意見の人に質問しやすくなり、違う考えの人に思いを聞きやすくなりすることができた。

(5) 篠島中 2年 教材名「国境なき医師団・貫戸朋子」（中学道徳2 とびだそう未来へ：教育出版）

① ねらい

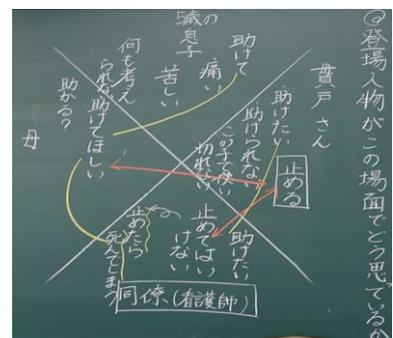
紛争地における貫戸さんの判断について話し合うことを通して、生命の尊厳についての理解を深め、かけがえのない生命を尊重しようとする態度を育てる。

② 授業の様子

本教材は、瀕死の少年を目の前にし、医療物資の支給が安定しない状況で、医師である貫戸さんが回復の見込みのない少年に貴重な酸素を送り続けるか迷う姿が描かれている。

導入では、Xチャートを活用し、貫戸さんの立場や思いを整理させた（写真6）。生徒は、教材に登場する人々の心情をまとめていく中で「助けたい」という思いが共通していることを見い出していた。

展開では、貫戸さんの判断は正しかったのかを考えさせた。黒板の「正しい」・「正しくない」と書かれた座標軸に、ネームカードを貼らせた（写真7）。貼った位置の理由を問うと、「次にやってくる患者の命を救うことも大切だけど、少年の酸素を切ることは目の前にある命を見捨てたことになる」「助かる可能性が高い人たちに酸素を取っておくのは正しい判断だった」といった意見が出た。その後、話し合いを通して、考え方が変わった生徒はネームカードを貼り直させた。



【写真6 思考ツールの活用】



【写真7 思考ツールの活用】

③ 考察

仮説1について、母親の思いを考えさせる場面を設定したことで、教材内の状況を基にした発言があり、母親の目線に立って考えることができた。しかし、本教材は極限状況の医療現場という日常生活とのつながりが難しい内容であり、日常生活に目を向けさせることができなかった。

仮説2について、Xチャートによってそれぞれのつながりや対立を明確化することができた。そのため、貫戸さんの立場に立って判断が正しかったかを考えさせることができた。また、座標軸の活用では、他の生徒の立場が視覚的に捉えやすくなっていたことで、立場を明確にして話し合わせることができた。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

仮説1について、日常生活での行動に目を向けさせたことで、教科書と似た場面で、自分がどのように感じ、どのような行動をとるか考えさせることができた。教材と日常生活とのつながりを学んだことにより、自己の生き方についての考えを深めさせることができた。

仮説2について、道徳的諸価値について意見交換をする場で座標軸やXチャートなどの思考ツールを用いたことで、学級全体の意見を可視化することができた。そのため、話し合いの場面では、相手がどのような考えをもっているのかが明確になり、立場を理解した上で話し合いを行うことができた。また、比較のために思考ツールを用いたことで、視覚的に場面によって心情に変化が起きた児童生徒を捉えやすくすることができた。それにより、今の自分の考え方だけではなく、よりよい生き方、考え方を他者と共に見つけようとする気持ちを高めることができた。

(2) 今後の課題

座標軸やXチャートなど、思考ツールを活用することで、多様な意見に触れることができ、活発な意見交換の一助となった。しかし、他の意見集約の方法より効果的だったかどうかの検証はできていない。そのため、児童生徒の思考の広がりや深まりについては疑問が残った。

日常生活の問題について扱ったことで、児童生徒は教材と自分の生き方について関連づけて考えることができた。一方で、教材の内容が難しいものは説明に多くの時間を割いてしまい、考えを深める時間が十分に確保できなかった。また、日常生活の問題と近づけようと意識しすぎるあまり、その後の主発問とかけ離れたテーマで話し合いが進められたこともあった。教材を吟味した上で、授業の導入や展開の工夫が必要だと感じた。

道徳で学んだことを実生活につなげていくことは大切である。日常生活と類似する出来事を取り上げたり、多様な考え方に触れさせたりすることを通して児童生徒の道徳的実践力を身に付けさせたい。